

# デイヴィッド・ライアンのポストモダニティ論 の再検討

—監視社会の諸問題に関する考察の文脈—

萩原 優騎\*

## Reconsidering David Lyon's Postmodernity Theory: Contexts of the Argument on the Problems of Surveillance Society

Yuki Hagiwara

### Abstract

David Lyon argues that contemporary society, where computer technology has developed remarkably and become widespread, is a surveillance society. He describes this state of affairs as postmodernity. In other words, his argument of surveillance in the contemporary society is inseparable from the question of the social situation as its context. However, postmodernity as defined by him is not the state after the end of modernity. On the contrary, he says that postmodernity is superimposed on some aspects of modern conditions, and on the other hand, replaces others. In order to discuss this, he refers to previous theories by various researchers with postmodern positions and develops his own argument. The purpose of this paper is to reexamine his considerations and their premises as described above, question their validity, and explore the possibility of developing his argument more precisely. As one possibility for achieving this purpose, we will focus on the reflexive modernization theory of sociology.

\* 東京海洋大学学術研究院海洋政策文化学部門准教授  
国際基督教大学社会科学研究所研究員・教養学部非常勤講師

## I. はじめに

筆者は 2024 年度より、科学研究費・基盤研究（C）の研究課題「プライバシーに関する実証的・思想的研究の統合モデルの構築に向けた領域横断的探究」に着手した。本研究を開始するに当たり、先行研究における方法や論点の精査が必要であると考えた。そうした中で注目した一人が、監視（surveillance）の諸問題に関して、具体的な事例と理論とを関連づけて論じている、社会学者のデイヴィッド・ライアン（David Lyon）である。ライアンは、現代における監視をその文脈としての社会状況との関連において探究している。それゆえ、ライアンの議論を正確に、そして深く理解するには、社会状況についての問いを含めて把握する必要がある。ライアンによると、現代の社会状況を示す概念として適切なのは「ポストモダニティ（postmodernity）」であるという。本稿では、ライアンがポストモダニティを論じるに際して言及している論者たちの理論や視点との比較を行う。その過程で特に注目するのは、アンソニー・ギデنز（Anthony Giddens）である。ライアンはギデنزに賛意を示しつつ、自身の理論的立場との違いを強調している。しかし、両者の異同を詳細に検討してみると、それは必ずしも自明ではないことが明らかになる。これらの考察を通じて、ライアンによる問いをさらに先へと進める可能性を模索することが本稿の課題である。

はじめに、ライアンのポストモダニティ論の諸前提を概観する。特に、監視に関する研究との関係性や、ポストモダニティの定義を確認する。次に、先行研究において示されている諸理論をライアンがどのように評価し、自身の主張とどのように関連づけているのかということを見る。先行研究とライアンの主張との対比により、後者の特徴がより明確になるはずである。続いて、ライアンが「ポストモダニティ」という概念を選択する理由を、それに類する諸概念を参照しつつ検討する。この作業を通じて、ライアンの選択が適切であると言えるのかということをも問う。最後に、ライアンによる「ポストモダニティ」の位置づけを批判的に問い直し、その結果として見えてくる新たな可能性と、それに基づく研究の方向性を示す。なお、ライアンがポストモダニティ論にて示している論点は多岐に亘り、考察の対象となっている論者も膨大な数に及ぶため、本稿の限られた紙幅でそれらを網羅することは到底できない。それゆえ、先述した筆者の研究課題に深く関係し、かつ、筆者がこれまでに展開してきた研究を深めると共にその諸前提を問い直すために不可欠であると考えられる論点に、本稿での検討の範囲を限定する。また、事例研究との関連性や、本稿にて検討の対象とするライアンの論考以降に刊行された先行研究にて扱われている理論や論点も、考

察の範囲には含めない。

## Ⅱ. ライアンのパストモダニティ論

### 1. 監視研究とパストモダニティ論の関係

デイヴィッド・ライアンは、監視に関わる諸問題を対象とした「監視研究 (surveillance studies)」と呼ばれる学際的領域の先駆者として知られている。最初に、ライアンによる「監視」の定義を確認しておきたい。それは、データが収集される人々に影響を与える、もしくはその人々を管理することを目的とした、個人データの収集と処理の全てである (Lyon, 2001, p.2=2002, p.13) <sup>(1)</sup>。この包括的な定義からも明らかであるように、ライアンの言う「監視」は様々な時代や場所にて確認され得るものである。一方、監視の形態やその効果、監視と人々との関係等は、時代や場所によって多様であり得る。また、ある監視行為が異なる時代や場所に共通に確認できたとしても、その社会的な位置づけや意味は異なる可能性がある <sup>(2)</sup>。そのような監視の多様性、多義性を理解しつつ、ライアンは主として現代社会における監視に目を向ける。その特徴とは、互いに警戒し合う生身の人間に関わるものではなく、個人から抽出された事実の断片を探求することである (Lyon, 2001, p.2=2002, p.13)。このような監視の特徴が現れた背景には、情報を対象とした科学技術の発達と普及がある。ライアンによると、今日の主要な監視の手段はコンピュータの能力に存するのであり、収集されたデータを保存し、照合し、修正し、処理し、売買し、流通させることが可能になった (Lyon, 2001, p.2=2002, p.13)。こうした状況は、しばしば「情報社会 (information society)」と形容されてきた。情報社会の本質的な側面の一つは、それが同様に「監視社会 (surveillance society)」でもあるということにほかならない (Lyon, 2001, p.5=2002, p.17)。

これらの記述から、ライアンが自らの考察の主な対象となる範囲を限定していることが読み取れる。統治や管理の過程において情報通信技術に依拠するあらゆる社会は「監視社会」であると、ライアンは論じる (Lyon, 2001, p.1=2002, p.11)。このように定義した場合、「情報通信技術」としてどのようなものを想定するのかということ次第で、考察の対象となる範囲も変わり得る。先述のように、ライアンはコンピュー

---

(1) 邦訳のある文献からの引用に際しては、訳語を適宜改めた。

(2) 様々な監視の影響下での人々の認識や反応は、その文脈によって変わり得る。この点については、萩原 (2023b) にて詳しく検討した。

タを中心とした技術の発達と普及に着目する。そのような監視は近代的生活の重要な特徴であり、多くの日常的な取引や交流の効率性や利便性のために、私たちはそれに依存している (Lyon, 2001, p.2=2002, p.13)。こうした説明から、ライアンが主な検討の対象とする状況は近代以降に出現したと考えられていることを確認できる。近代に至るまでは一般的に監視の規模は小さく、警戒も体系化されていなかったが、今日においては地理的に遠く離れた機関や組織によってルーティーン化され常態化された監視が、生活のあらゆる側面に埋め込まれている (Lyon, 2001, p.1=2002, p.12)。

今日の状況に至るまでの変化の過程は、次のように整理することができる。伝統的な社会では、人々は物理的身体を介して接し合うのであり、他の誰かと共にいるという「共存 (co-presence)」において、社会的な交流や交換がなされていた (Lyon, 2001, p.15=2002, p.31)。ところが、従来の諸前提が近代化の過程で自明性を失っていく。交通やコミュニケーションによって人々の可動性が増大し、社会の諸制度が人々の関係を媒介するようになるに伴い、統合様式が急激に変化し始めた (Lyon, 2001, p.16=2002, p.31)。こうした事態を背景として進展した状況を、ライアンは「身体消失」と形容する。すなわち、ますます多くの事柄が距離を隔ててなされるようになり、個人識別番号等の信用の証拠が、共存する人間関係に由来する信用の代理となった (Lyon, 2001, p.16=2002, p.31)。そして 1960 年代以降、「身体消失」がさらに進展したとされる。それは情報通信技術によってもたらされた状況であり、電子メール、クレジットカード、携帯電話、インターネット等が例として挙げられている。電子的手段に媒介されることにより、非身体化され抽象化された関係はデータバンクやネットワーク化されたコンピュータシステムの中に保持されるようになった (Lyon, 2001, p.16=2002, p.32)。こうした過程を経て到来した現代社会の新たな状況が、ライアンの言う「ポストモダニティ」である。

## 2. ポストモダニティの定義

次に、ライアンによる「ポストモダニティ」という概念の理論的な位置づけを明らかにする。ポストモダニティとは、多くの先進社会において 20 世紀末に起きている大きな社会的・文化的変動の多様性を告知する重層的な概念である (Lyon, 1994, p. vii=1996, p.7)。この概念について論じるには、ポストモダニティと呼ばれる状況に先行するはずの、近代という時代とその状況に対するライアンの理解を見ておかなければならない。近代とは、16 世紀半ば以降に様々なレベルで発生した変化の総体

であると、ライアンは定義する (Lyon, 1994, p.21=1996, p.46) <sup>(3)</sup>。近代と対置されるのは、「伝統 (tradition)」である。それは、村落共同体、宗教的生活、権力を握る長老や王によって与えられた規律の集合体である (Lyon, 1994, p.20=1996, p.46)。続いて、両者の関係が考察される。ライアンによると、近代はあらゆる伝統的な手法を問いに付し、当然視されていた規律を新しいものに置き換えた (Lyon, 1994, p.20=1996, p.46)。この過程で重要な役割を果たしたとされるのが、フランスの啓蒙主義 (the Enlightenment) である。啓蒙主義は、今日用いられている意味での「近代」という概念を確立したのであり、こうして「理性 (reason)」に依拠した近代が優勢となった (Lyon, 1994, p.19=1996, pp.43-44)。そのことは、思想と社会秩序との結びつきにおいて捉えられる必要がある。近代世界の特徴とは、伝統の放逐あるいは周辺化とそのグローバル化であり、近代の推進力は進歩や理性の力に対する信仰と強く結びついていた (Lyon, 1994, p.19=1996, p.44)。

ライアンの理解では、ヨーロッパ思想は「摂理 (providence)」から「進歩 (progress)」へ、そして「ニヒリズム (nihilism)」へという変化を辿ったとされる。摂理とは、キリスト教における創造後の世界に対する神の「配慮 (care)」であり、歴史が特定の目的に向けて直線的に進行するように見守ることである (Lyon, 1994, p.5=1996, p.16)。このような伝統的な観点は近代化と共に衰退し、それに代わって「進歩」という考え方が登場する。それは、特に初期の啓蒙主義の影響下において、物事は一般に改善されているという確信と結びついていた (Lyon, 1994, p.7=1996, p.17)。ここでは、人間の「理性」が強調された。理性を中世思想と伝統から奪還し、その役割を強調したという点で、進歩の観念は摂理の世俗版であると、ライアンは評している (Lyon, 1994, p.5=1996, p.17)。ところが、近代的な進歩の理念の自明性は次第に失われていく。ライアンは、そのことを思想的側面と社会的側面の両面において論じている。第一に、知の相対性が近代思想の内に確立されたこと、すなわち、モダニティの内にニヒリズムが胚胎したことである (Lyon, 1994, p.5=1996, p.18)。しかも、それは理性自体によってもたらされた出来事であると、ライアンは論じる。すなわち、近代的理性の「絶えず疑う」という態度が理性そのものに向かう時、ニヒリズムが生まれる (Lyon, 1994, p.8=1996, p.22)。第二に、20 世紀の後半以降に世界各地で起き

---

(3) 近代の出発点の位置づけに関しては、歴史学や社会学をはじめとする諸領域において、様々な学説が存在する。しかし、そのことは本稿の主たる検討課題ではないゆえ、ここではライアンの定義を暫定的に採用する。

た一連の出来事が与えた影響である。政治的独立による植民地主義の消滅、環境破壊、ヨーロッパ各地での新しい社会運動、イスラム等の西欧化への対抗勢力の台頭といった例が挙げられている。これらの出来事を通じて、進歩への信仰が揺らぐと共に、普遍的な知もしくは文化といった観念も疑問視された（Lyon, 1994, p.6=1996, pp.18-19）。このような事態を背景として「ポストモダニティ」という概念が登場したと、ライアンは説明している。それは、台頭しつつある上記の状況を記述するための新しい言葉として知識人たちが探し求めたものだった（Lyon, 1994, p.6=1996, p.19）。

続いて、諸概念の定義の区別がなされる。「ポストモダン（postmodern）」とはモダニティの枯渇であり、分析の道具として文化にアクセントがある場合には「ポストモダニズム（postmodernism）」、社会的なものが強調される場合には「ポストモダニティ」であるという（Lyon, 1994, p.6=1996, pp.19-20）。ポストモダニズムに顕著な現象として、科学の権威の失墜をライアンは挙げる。「科学は観察事実の確固たる基盤の上に築かれている」という「基礎づけ主義（foundationalism）」をポストモダニズムは放棄し、そしてそれよりもさらに進んで、啓蒙主義が関与した全てを問いに付す（Lyon, 1994, p.7=1996, p.20）。ポストモダニティも、既存の権威に対する懐疑という点では共通している。従来の社会分析及び政治的実践の様式は問いに付されるのであり、新たな情報通信技術の突出と、既存の生産中心性を蝕む消費主義が重要な課題となる（Lyon, 1994, p.7=1996, pp.20-21）。ただし、ポストモダニズムとポストモダニティは上述のように定義され得るとしても、それら相互の関連性を重視すべきであると、ライアンは考える。文化的なものと社会的なものを区別することはできても、両者の分離は不可能であるという（Lyon, 1994, p.6=1996, p.20）。

### Ⅲ. 先行研究の諸理論に対するライアンの評価

#### 1. ポストモダンとポスト産業社会

「ポストモダン」という概念が様々な領域で盛んに論じられるようになった一因として、ジャン＝フランソワ・リオタール（Jean-François Lyotard）の影響の大きさをライアンは挙げている。リオタールによると、ポストモダンとは「メタ物語（metanarrative）」に対する不信感である（Lyotard, 1979, p.7=1986, pp.8-9）。リオタールは、メタ物語を「大きな物語（grand narrative）」とも表現している。それは、精神の弁証法、主体の解放、富の創造等であり、近代はそうした物語に依拠することで自らを正当化してきた（Lyotard, 1979, p.7=1986, p.8）。先述した「進歩」という

理念も、近代のメタ物語の典型である。先程見たように、「進歩」から「ニヒリズム」へという変化にライアンは言及していた。この視点に基づくならば、19世紀に脱正当化の種が蒔かれたのであり、その収穫は20世紀後半のコンピュータ技術の出現を待たなければならなかった (Lyon, 1994, pp.12-13=1996, p.31)。ライアンがそのように述べるのは、コンピュータ技術の出現によってメタ物語の必要性の低下がもたらされたと考えられるからである。すなわち、システムの能率や生産性といった遂行性 (performativity) が強調されるようになるに伴い、知の固有の価値や目的という課題から遠ざかっていく (Lyon, 1994, p.13=1996, p.31)。

上記のリオタールの主張に対して、ライアンは全面的に同意しているわけではない。リオタールはパストモダンにおける哲学的なヒエラルキーの解体に重点を置く一方で、社会的変容の問題の大部分を回避していると、ライアンは指摘する (Lyon, 1999, pp.55-56)。この指摘を正確に理解するには、ライアンがリオタールとの関連でダニエル・ベル (Daniel Bell) をどのように捉えているのかということを把握する必要がある。ベルは、近代の新たな段階としての「パスト産業社会 (post-industrial society)」の到来を論じた。ベルの理解では、社会は社会構造、政治形態、文化という三つの部門に分けることができる (Bell, 1973, p.12=1975, p.23)。これらのうち、パスト産業社会という概念に主に関係しているのは社会構造の変化であるという<sup>(4)</sup>。産業社会は人間と機械の関係が中心であり、自然環境を技術的環境に変えるためにエネルギーを使用する (Bell, 1973, p.116=1975, p.163)。パスト産業社会においても、機械との関係は失われない。一方、そこでは情報に基づく知的技術が機械技術と共に進歩する (Bell, 1973, p.116=1975, p.163)。このように、ベルの考察においては社会的側面が強調されているという点において、リオタールの議論の傾向とは異なる。

ただし、ライアンはパスト産業社会に関するベルの主張をパストモダンとは異なる立場として理解している。例えば、パスト産業社会においては新しい科学技術の恩恵が公正に配分されることが想定されているかのようであり、そうした技術との関連で失業が問題になるといった事態はベルやその追従者の著作ではほとんど論じられていないという (Lyon, 1994, p.40=1996, p.79)。つまり、パストモダンに関わる論者に顕著な、科学に対する否定的な評価や位置づけが、パスト産業社会論においては前面

---

(4) 「どのように経済が変化し、職業形態が再編されるか」とベルは問うが、そのことによって「社会構造の変化が政治形態及び文化にて生じる変化を決定づけている」と主張しようとしているわけではないという (Bell, 1973, p.12=1975, p.23)。



化していない。その意味で、ベルの議論は進歩の観念に依拠しているが、リオタールの場合は進歩なきポスト産業社会論であると、ライアンは評している (Lyon, 1994, p.38=1996, p.76)。

リオタールに対する評価にも見られるように、ライアンはポストモダンをめぐる各種の言説にある程度の共感を示しつつ、自身の見解と一致するとは限らないことも認識している。例えば、ポストモダニティを扱った理論においては技術に関する議論が比較的少ない傾向にあり、新しい技術についての社会的側面がポストモダニティの社会学にて論じられる必要があるという (Lyon, 1994, p.46=1996, p.89)。既に詳述したように、ポストモダニティに関するライアンの考察は、監視研究の問題関心と不可分な関係にある。それゆえ、技術をめぐる諸問題を社会との関係において問うことの重要性をライアンが強調するのは当然であると言えよう。では、ライアンが批判する従来の議論の傾向は、なぜ生じたのだろうか。それは、技術と観念的に結びついた「進歩」というものが、ポストモダンの分析においては放棄されていたからではないかという (Lyon, 1994, p.50=1996, p.98)。しかし、進歩に否定的な評価を下すとしても、技術の発展と社会の変容との関連性を問う必要がなくなるわけではないと、ライアンは考える。

## 2. ポストモダンとパノプティコン

ポストモダニティにおける新しい技術と社会との関係をめぐってライアンが展開している議論のうち、本稿との関連において特に重要と思われる概念の一つは、日本語では「一望監視装置」と訳される「パノプティコン (panopticon)」である。情報に関わる新しい技術の諸問題を批判的に考察している人物として、マーク・ポスター (Mark Poster) が挙げられている。後述のように、ポスターは現代におけるパノプティコンの問題を提起した人物でもある。そのこととの関連で、ポスターによるポストモダンについての議論をライアンは扱っている。近代社会を特徴づけてきた堅固な制度的慣習が電子的に媒介されたコミュニケーションの地殻変動によって揺らいでおり、その輪郭が未だ全く明確ではない新たな慣習が再構成されつつあると、ポスターは論じる (Poster, 1990, p.14=2001, p.28)。このことを考察するためのキーワードとして掲げられているのが、「情報様式 (mode of information)」である。ポスターの視点では、象徴交換の構造のバリエーションによって歴史が区分されるのであり、現在の文化においてはとりわけ「情報」に重要性が付与されている (Poster, 1990, p.6=2001,



p.12)。

ポスターは、過去の時代を特徴づけるものとして、声を媒介とした対面によるコミュニケーションや、印刷物を媒介とした書き言葉によるコミュニケーションを挙げている。コミュニケーションが時間と空間に制限されている程度が、社会の形態を決定しているという (Poster, 1990, p.8=2001, p.16)。電子的に媒介されたコミュニケーションを通じて、大量の情報が高速度で広い範囲にわたってやりとりされる現代は、従来にも増して、それらの制限の度合いが減少した時代である。このような特徴を有する現代は、「電子的段階」と称される。この段階では、継続的な不安定性において自己は脱中心化され、散乱し、多数化されている (Poster, 1990, p.6=2001, p.13)。これは、人々の日常における各種のコミュニケーションがコンピュータに媒介されるようになった事態を表現したものである。主体はもはや絶対的な時間・空間の一点に位置づけられることはなく、データベースによって増殖され、コンピュータによるメッセージや会議によって散乱させられている (Poster, 1990, p.15=2001, p.30)。

電子的段階における監視を、ポスターは「スーパーパノプティコン (superpanopticon)」と形容する。かつてミシェル・フーコー (Michel Foucault) は、監獄における監視装置をモデルとして近代初期の監視の特徴を論じた。パノプティコンとは、囚人を閉じ込めた円環状の建物の中心に看守のいる塔を配置することで、常に監視されていると囚人に自覚させ、権力の自動的な作用を確保する装置である (Foucault, 1975, pp.233-234=2020, pp.231-232)。権力の自動的な作用とは、囚人に監視の視線及び規範が内面化されることを意味する。囚人は権力による強制を自発的に自身に働かせること、すなわち、権力的関係を自身に組み込むことによって、自らが服従強制の本源になる (Foucault, 1975, p.236=2020, p.234)。このように、フーコーが論じたパノプティコンの監視は、その施設と看守の存在を前提として機能する。しかし、ポスターによると、コンピュータ化が進んだ現代のデータベースは、壁、窓、塔、看守が不在の監視システムである (Poster, 1990, p.93=2001, p.205)。その事例として、クレジットカードを利用した商品の購入をはじめとする、日常的な各種の取引が挙げられている。それぞれの取引は記録され、コード化されてデータベースに加えられるのであり、人々は情報の源泉であると同時にその記録者でもある (Poster, 1990, p.93=2001, p.205)。こうしてデータベースに登録される情報の具体的な内容や用途、情報がもたらす効果や影響を、個々人は必ずしも十分には認識していない。データベースにおいては、当人が知らないまま付加的に自己が構築されている (Poster, 1990,

p.97=2001, p.214)。

こうした状況に対して、どのような対応が可能であり得るのか。ポスターは、「公衆にメモリーやデータバンクへの自由なアクセスを与えよ」というリオタールの主張に言及する (Lyotard, 1979, pp.107-108=1986, p.163)。これは、Lyotard (1986) の結論部分で述べられていることである。ただし、スーパーパノプティコンへの抵抗の方途は、ポスターの議論において明白ではなく、上記のリオタールの主張に対してもポスターは全面的に賛成しているわけではないだろうと、ライアンは評する (Lyon, 1994, p.47=1996, pp.91-92)。ライアンがそのように評価することの根拠は、次のように述べられている。いかなる連帯的行為も不適切なものにしてしまう、統合を解体する力を情報様式はそれ自体の内に有している (Lyon, 1994, p.47=1996, p.92)。しかし、これが具体的にどのようなことを意味するのか、ライアンは明言していない。ライアンが念頭に置いていると思われるのは、Poster (1990) の結論部分である。その箇所ではポスターは、先述したリオタールの主張を再び引用して、それに対する見解を表明している。リオタールはポストモダン政治学の重要な一步を踏み出しているが、次の一步がはっきりしないままであり、問題をより包括的に扱うためには、情報様式が統合を解体する力を持つという問題に直面しなければならない (Poster, 1990, p.154=2001, pp.346-347)。つまり、リオタールのポストモダン論において十分に問われていない論点に関して問いを深める可能性を示している点に、ライアンはポスターによる考察の一つの意義を見出していると言えよう。

### 3. ポストモダンと消費主義

ポストモダンニティにおける新しい技術と社会との関係についてのライアンの考察にて、もう一つのキーワードとして「消費主義 (consumerism)」が挙げられている。消費ブームを伴った資本主義及び産業主義の変動は、ベルの言うポスト産業社会を生み出した (Lyon, 1994, p.54=1996, p.104)。ただし、先述のように、ライアンはポスト産業社会をポストモダンと区別していた。むしろ、ポスト産業社会と呼ばれている状況は、ポストモダンのための物質的、社会的出発点だった (Lyon, 1994, p.54=1996, p.104) <sup>(5)</sup>。このことは、近代的な理念の失墜という、リオタールが指摘し

---

(5) 具体的には、以下のような点が記されている。流動的で柔軟な生産、サービスと情報労働者が多数を占める職業構造上の大変動、新しい技術が生産や社会に関わる新しい様々な方法を可能にすることである (Lyon, 1994, p.55=1996, p.104)。

た事柄に関係している。あらゆるものの交換価値への還元によって全ての価値が解消されてしまうかのように、ライアンは述べている (Lyon, 1994, p.55=1996, p.106)。そこにおいて、消費主義が台頭する。人々の日常生活は、消費者のライフスタイルと大量消費によって支配されている (Lyon, 1994, p.56=1996, p.107)。こうした事態を考慮に入れることが、ポストモダンをめぐる議論においては重要であると、ライアンは認識している。消費は、支配的な文化コードの要であると同時に、新しい社会状況と推定されるものでもあるという (Lyon, 1994, p.55=1996, p.104)。

ライアンは消費主義に関する様々な論点を扱っているが、それらの中で本稿における問題関心との関連で注目したいのは、アンソニー・ギデンズへの言及である。ただし、ギデンズの議論、特にその理論的側面と消費主義をめぐる論点との関係について、ライアンは詳述していない。それゆえ、両者の関係性を明確にしておく必要がある。ライアンも触れているように、ギデンズは現代社会の状況を「ポストモダン性」とは形容しない。代わりに、「ハイモダン性 (high modernity)」もしくは「後期モダン性 (late modernity)」と呼ぶ。そうした状況を説明するために、ギデンズは「脱埋め込み (disembedding)」という概念を導入する。それは、社会関係を特定の場所の束縛から解放し、広範な時間的・空間的距離を超えて再統合するメカニズムである (Giddens, 1991, p.2=2005, p.2)。ギデンズは、脱埋め込みをモダン性の本質的な特徴の一つと見なしている。脱埋め込みメカニズムはモダン性の制度的特徴を徹底させ、グローバル化してきたという (Giddens, 1991, p.2=2005, pp.2-3) <sup>(6)</sup>。このようにして到来した状況が、ハイモダン性もしくは後期モダン性である。そこにおいては、自己及びその制度的文脈は再帰的に形成されていく (Giddens, 1991, p.3=2005, p.3)。それぞれの個人にとって、再帰的な自己形成が重要な課題となる。個人のアイデンティティは再帰的に組織される試みとなるのであり、それは一貫性がありながらも絶えず修正される生活史の物語を維持するという、「自己の再帰のプロジェクト」である (Giddens, 1991, p.5=2005, p.5)。こうして自己言及性を伴って個人や社会が変化していく様相を、ギデンズは「再帰的近代化 (reflexive modernization)」と名づけた。

ハイモダン性の進展の過程には、情報通信技術の発達と普及が深く関係している。ハイモダン性においてはメディアが中心的な役割を果たしているものであり、マスコ

(6) ギデンズがグローバル化という現象を自身の近代化論とどのように関連づけているのか、また、その視点及び理論をどのように評価すべきであるのか、萩原 (2024a) にて考察した。

コミュニケーション、特に電子コミュニケーションの発達によってもたらされた影響の大きさを、ギデنز是指摘している（Giddens, 1991, p.4=2005, p.5）<sup>(7)</sup>。多くの情報が高速度で広い範囲にわたって流通するハイモダニティにおいては、ライアンと言う消費主義が顕在化する。自己の再帰的プロジェクトは、欲しい商品の所有及び人工的に枠づけされたライフスタイルという形をとる傾向にあり、常に新しい商品を消費することが自己の発達に部分的に取って代わるからである（Giddens, 1991, p.198=2005, p.224）。先述のように、ギデنزはこの傾向をモダニティの徹底化の産物として捉えている。しかし、ギデنزが記述している事態は、ハイモダニティではなくポストモダニティの到来を示すものにほかならないと、ライアンは考える。それは、合理的で目的志向の近代的な個人との決別であり、アイデンティティや人間関係を試行することの歓迎であるという（Lyon, 1994, p.60=1996, p.115）。

#### Ⅳ. なぜ「ポストモダニティ」なのか

##### 1. パノプティックソート

ライアンの理解では、ポスターやギデنزの議論の検討から見えてきた事柄はポストモダニティの特徴をまさに指し示している。消費者選択、メディアの多様化、（ポスト）モダニティのグローバル化の世界において、価値や信仰はその一貫性や連続性を失う（Lyon, 1994, p.61=1996, p.117）。こうして、相対性や不確実性が顕在化する。それは、「選択」が至上のものである世界の帰結であり、躊躇、不安、疑念は選択の代価である（Lyon, 1994, pp.61-62=1996, p.117）。さらにライアンは、パノプティコンと消費主義という、これまで見てきた二つの論点を積極的に関係づけた議論の展開の可能性を示唆している。現代においては、消費者の欲望もパノプティコンに由来する方法によって方向づけられ条件づけられているという（Lyon, 1994, p.68=1996, p.128）。Lyon（1994）では、この点に関してオスカー・H・ガンディ・ジュニア（Oscar H. Gandy, Jr.）の論考が注に挙げられているにとどまり、具体的な考察が展開されていない。しかし、ライアンが提示したポストモダニティを特徴づけるとされる「選択」の問題に関する問いを深める上で、ガンディの考察の詳細を確認することは重要であると思われる。

ガンディは、「パノプティックソート（panoptic sort）」という概念を提唱した。そ

---

(7) 情報通信技術が発達し普及した状況に関するギデنزの考察、そしてその意義や課題については、萩原（2023a）にて論じた。

れは、グローバル資本主義システムを導く「全てを見通す目」であり、個人を推定値に基づいて分類する差別的な過程である（Gandy, 2021, p.15）。その出現は、情報を対象とした科学技術の発達と普及に伴っていた。ガンディの着想とフーコーの議論との関係は、以下のように説明できる。パノプティコンの計画の中には、個別化する観察、特徴づけと分類、分析的な空間配置といった関心を見出すことができると、フーコーは述べている（Foucault, 1975, p.237=2020, p.234）。これらがパノプティコンの分類の機能であり、病人や労働者の分類が事例として示されている。続いてフーコーは、パノプティコンの実験の機能に言及する。パノプティコンは、実験を行い、行動を変えさせ、個人を訓育もしくは矯正するための装置として活用され得る（Foucault, 1975, p.237=2020, p.235）。その例としては、医薬の効能の確認や、異なる処罰を囚人に試すことが挙げられている。フーコーが論じたパノプティコンのこれらの側面が、現代社会における消費者の欲望という論点に深く関係していると、ガンディは考える。マーケティングの担当者が「～向け」と定義する消費基準や、消費者が自身を商品やブランドと同一化することに見られるように、個人は自身を分類上の対象に変えることに積極的に参加する（Gandy, 2021, p.25）。ここには、フーコーの言う「分類」と「実験」の両側面を確認できるのであり、それらが一体となって消費者の欲望を喚起する。

ライアンは、別の機会に上記の論点に触れ、ガンディの主張を次のように要約している。企業は、広告やその他の消費の誘引となるものをより正確にターゲットにするために、消費者情報のデータベースを利用する（Lyon, 2001, p.65=2002, p.112）。また、現代的な監視が消費活動に与える影響には、従来のものとは大きく異なる点があるという。すなわち、その影響力は、モダニティの古典的、制度的、身体規律的な監視の段階と比べて強制的でなくなる一方で、より包括的になっている（Lyon, 2001, p.146=2002, p.249）。ただし、ガンディの記述には、ライアンがここで言及していない論点も含まれている。それは、得られたデータに基づいて、どのようにマーケティングを展開するのかということである。この点に関してガンディが注目するのは、権威（authority）の役割である。例えば、「何が流行っていて、何が流行っていないか」、人々が依拠するカルチャーの専門家は教えてくれる（Gandy, 2021, p.25）。ガンディが以上のような論点を提起したのは、1990年代の前半である。当時、データベースによるマーケティングの力を広範に増大させる、インターネットの商業化が始まっていた（Lyon, 2007, p.42=2011, pp.64-65）。パノプティックソートの機能がより高度化し、個々人に対する監視が徹底されていく中で、各々の認識や価値の形成及び変容

に対する影響力をより強めていくという事態がもたらされた<sup>(8)</sup>。

## 2. 「ポストモダニティ」か「ハイモダニティ」か

ここまでの議論からも分かるように、ライアンのポストモダニティをめぐる考察においては、文化的及び社会的な側面が強調されている。ライアンによると、ポストモダニティの問いは、文化的変容を図式化し、現代の社会現象を理解することの中心にある (Lyon, 1994, p.70=1996, p.131)。ただし、「モダンの終焉とポストモダンの始まり」といった極端な図式を、ライアンは想定しているわけではない。むしろ、モダニティを再評価し、モダニティ自体が不安定で予測困難であることの指標として時代の兆しを読み取り、かつて約束されていた未来を放棄するための機会を、ポストモダニティの問いは提供するという (Lyon, 1994, p.70=1996, p.131)。こうした傾向は社会学の領域に広く見られると、ライアンは指摘する。今や、社会学は文化の重要性に気づいたのであり、ポストモダニズムの文化はそれと連動したポストモダニティという社会変容の証拠と考えられているという (Lyon, 1994, p.70=1996, p.132)。その一方で、ライアンは従来のポストモダンに関わる言説の傾向に無批判であるわけではない。単なる多様性や混乱は問題への指針としては役に立たないのであり、何らかの代替的な展望なしには、ポストモダンの立場は単なる自己満足や身勝手な冷笑へと墮落してしまうという (Lyon, 1994, p.77=1996, p.144)。

ポストモダニティを論じることの意義を、ライアンは次のように整理している。ポストモダニティとは、現代の社会変動に関わる重要な問いを警告する問題構成であり、既存の状態を記述するものというよりは、今日の社会の本質と方向性をめぐる論争への参加を誘う概念である (Lyon, 1994, pp.84-85=1996, pp.158-159)。つまり、ポストモダニティとは、既に出現してしまった状況を後追的に記述するための概念ではない。全く予見しがたい社会的・文化的変化が生じつつあるのであり、最適かどうかは議論の余地があるとしても、「ポストモダニティ」はそのことを要約するための概念であるという (Lyon, 1994, p.85=1996, p.158)。それでは、なぜライアンは「ポストモダニティ」という概念を選択するのか。重要なのは、何が起きているのかということの理解であり、それを把握するための概念への同意ではないのだから、現時点では「ポストモダニティ」でよいだろうと、ライアンは述べる (Lyon, 1994,

---

(8) 萩原 (2024b) では、この論点を現代社会における「パーソナライゼーション (personalization)」の問題として捉え、検討を試みた。



p.85=1996, p.158)。「パストモダニティ」という概念を使用することの利点については、Lyon (1994) 以降に執筆された論考においても繰り返して説かれている。「パストモダニティ」という概念の特に便利な側面は、それが依然としてモダニティを参照し前提としていることであり、この概念や「パストモダン」の理論を受け入れたからといって、これらが既存のものに取って代わるとは限らないという (Lyon, 2007, p.51=2011, p.81)。したがって、パストモダニティにおける監視に関わる事柄に、従来から存在してきた諸要素を確認できたとしても不思議ではない。その例として、身体を対象とした監視、統計による人口調査等が挙げられている。これらの要素は新しく現れたのではなく、むしろ後景から前面にせり出してきたのであり、以前にはなかった方法で監視の光景を支配している (Lyon, 2007, p.51=2011, p.81)。

また、各種の論争が抱えてきた課題に対する指摘も見られる。パストモダン論争の多くは、現実の社会的、経済的、政治的状況を十分に参照することなしに、思弁的な探究の熱に浮かされた状態で行われてきたという (Lyon, 1994, p.85=1996, p.158)。加えて、文化的な側面への着目の重要性が再び説かれる。多くの社会分析はパストモダンの文化的次元を見てこなかったものであり、特に情報とコミュニケーション技術に関しては、社会的分析と文化的分析を並行して進めることが急務であるとされる (Lyon, 1994, p.85=1996, p.158)。この問題提起の直後に、ギデンズの議論を念頭に置いていると思われる表現がある。「パストモダン」か「ハイモダン」かはともかく、出現しつつある社会秩序は何よりもコミュニケーションの新しい様式によって特徴づけられているという (Lyon, 1994, p.85=1996, p.158)。先述のように、「パストモダニティ」もしくは「パストモダン」という概念を、今日の状況を表すために適切なものとして暫定的に採用していると、ライアンは主張する。そのことが、ここで改めて表明されていると考えられる。

ただし、ライアン自身としては、「ハイモダニティ」よりも「パストモダニティ」をより適切な表現として採用するはずである。Lyon (1994) の第2版である Lyon (1999) では、多くの箇所にて加筆、削除、修正等がなされている。それらの中でも、本稿との関連において注目すべきである箇所の一つが、第3章の末尾である。そこにおいてライアンは、ハイモダニティをめぐるギデンズの主張を次のように要約する。「ハイモダニティ」という概念は、モダニティの特定の諸特徴、特に電子的なコミュニケーション手段を介して、遠くで発生したことが地域の出来事や自身に与える影響を強調するものである (Lyon, 1999, p.45)。これに続いて、ライアンは自らの判断を



示している。ギデンズが「ハイモダニティ」と表現している諸特徴は、まさにポストモダニティについて語らせるための社会的指標であるにもかかわらず、そこに向かわない十分な理由があるとギデンズは主張しているという (Lyon, 1999, p.45)。この記述は、ライアンがギデンズの主張に十分には納得していないということの表明に等しいだろう。つまり、ギデンズが掲げたハイモダニティの特徴とされるものは、ライアンの理解ではポストモダニティを示すものにほかならない。

### 3. モダニティとポストモダニティとの関係

しかし、先程引用した箇所でもライアン自身も言及していた、「ポストモダニティ」が現代の社会状況に関する最適な表現であるのかということは、なお検討を要するはずである。より適切と思われる表現が存在し得るならば、それを選択するという可能性もあるのではないだろうか。そのことを考察するために、モダニティとポストモダニティとの関係をライアンがどのように位置づけているのかという点に改めて注目してみたい。伝統社会と近代社会との完全な不連続を想定することと同様に、モダニティとポストモダニティとの完全な分裂を想定することは誤っていると、ライアンは述べている (Lyon, 1994, p.69=1996, p.130)。つまり、「プレモダンからモダンへ」、そして「モダンからポストモダンへ」という変化にはいずれも、前の時代とそれに続く時代との間に連続的な側面と不連続的な側面の両方が見られるということである。

この論点をより明確に理解するために有用であると思われるのは、村上陽一郎が科学史の領域において提唱した「聖俗革命 (Secular Revolution)」という概念である。それは、近代化の過程においては、どの時期にも分野にも、その切り口に「聖」から「俗」への移行が見られるということである (村上, 1976, p.11)。ヨーロッパにおいて近代化が進展した時期やその度合いは地域ごとに、また、領域ごとに様々である。加えて、特定の地域や領域における近代化とは、従来の要素がある時期に突如として近代的な要素に全面的に取って代わられたということでは必ずしもない。このように、変化は段階的で多様であり得るにもかかわらず、それらの過程のいずれにも「聖」から「俗」への移行という近代化の特徴を共通に観察できる。

既に触れたように、ライアンも「摂理」から「進歩」へという世俗化を指摘し、それをヨーロッパ思想における近代化の特徴の一つと見なしていた。ライアンは、パノプティコンに関しても世俗化との関連において論じている。パノプティコンとは、犯罪者の取り扱いを宗教に根差した方法から自己意識によるものへと転換することだっ

たのであり、それは全知の神の世俗的なパロディだった (Lyon, 1994, p.26=1996, p.56)。先述のように、摂理とは神の「配慮」に基づく「見守り」であるとライアンは考える。ところが、世俗化を経て登場したパノプティコンには、全知の神による見守りという宗教的な要素が抜け落ちている。ギデنزならば、このような世俗化とその過程を、「脱埋め込み」とそれに続く「再埋め込み (reembedding)」による再帰的な変化と表現するだろう。再埋め込みとは、脱埋め込みを遂げた社会関係が再度充当利用されたり作り直されたりしていくことである (Giddens, 1990, pp.79-80=1993, p.102)。村上は、再帰的近代化論との関連で聖俗革命を論じたことがある。聖俗革命において、位階構造の頂点である神は否定されたが、位階構造そのものは温存されているのであり、人間が神の位置に取って代わった (村上, 2007, p.15)。これは、位階構造における脱埋め込みと再埋め込みである。村上は、ヨーロッパにおける聖俗革命を通じた再帰的近代化を次のように表現している。それは、伝統社会が完全に姿を変えてしまうのではなく、伝統の中のあるものが再埋め込みされながら進行する現象である (村上, 2007, p.15)。

再帰的近代化論の観点から、モダニティからポストモダニティへの変化に関してライアンが述べている点を再検討する際にも有用であろう。社会の近代的特徴のいくつかは、ポストモダンの時代においても消え去っていないことは強調されるべきであると、ライアンは述べる (Lyon, 2001, p.142=2002, p.243)。ただし、近代的特徴が、かつてと同じ状態のまま残存しているとは限らない。ポストモダニティは近代状況のある諸側面に重ね合わされる一方で、その他の諸側面に取って代わるのであり、両者はコンピュータ化によって結びついている (Lyon, 2001, p.142=2002, p.243) <sup>(9)</sup>。そのような状況について、ライアンは社会の統合様式の変化という観点からも論じている。社会の統合様式は、信頼を伴う対面的関係やそれを拡張した諸制度から離脱しつつあり、ますます電子的に実現され、抽象的で非身体的なものになっている (Lyon, 2001, p.145=2002, p.249)。これに続く文章にて、社会の統合様式と監視との関係が示される。監視は信頼の証拠を供与するという意味で、非身体的な統合の一つの局面

(9) コンピュータ化は、慣れ親しんだプロセスを強化・拡張し、集権的な管理や個人生活の侵害に対する新たな不安をしばしば生み出すという (Lyon, 2001, p.113=2002, p.194)。情報収集や統計等、モダニティの進展と共に発達してきたものがコンピュータ化に伴って著しく高度化し、蓄積される情報の量が格段に増えたばかりか、その共有もより容易かつ広範となった。このような事態は、監視の再帰的变化として捉えることができる。

である（Lyon, 2001, p.145=2002, p.249）。野尻洋平は、ライアのこの記述に着目する。そして、ライアがここで述べていることは、近代化の進展過程で局所的に生じつつある質的な変化であり、それゆえ「脱近代」ではなく「後期近代」としてポストモダニティを解釈する方が妥当であろうと、野尻は結論する（野尻, 2017, p.137）。

## V. おわりに

本稿では、ライアが定義する意味での「ポストモダニティ」という概念を多角的に検討した。その作業を通じて、ライアの言う「ポストモダニティ」は、おそらく当人の想定する以上にギデنزの主張と重なる部分を有していることが見えてきた。前章の末尾に引用した野尻の見解において示されている「後期近代」という概念はギデنزも用いているが、それはモダニティの再帰的変容の過程を経て到来した社会状況として捉えることができる<sup>(10)</sup>。もちろん、ライアはモダニティの終焉を論じているわけではないことは、各種の論考からも明らかである。例えば、モダニティにおいて出現して今日さらに拡大されたものとして、多国籍企業による不安定な雇用等を挙げ、それを徹底化したモダニティと形容している（Lyon, 1994, p.60=1996, p.114）。今日の状況をモダニティの徹底化と捉えている点でもギデنزと共通するが、これまでの検討から確認できたのは、両者の主張に少なからぬ共通点があることにとどまらない。むしろ、本稿においては、ライアのポストモダニティ論に関して立ち入った検討を試みた結果として、それとの対比を通じて、ギデنزの議論をもより深める可能性に到達できたと考える。以下において、そのことに触れておきたい。

ギデنزによるモダニティの「徹底化」という表現に対しては、次のような批判が提起されている。ギデنزが再帰的近代化を再帰性の増大という連続的な過程として位置づけたことの帰結として、徹底化以前と以後を区別する基準が必ずしも明確ではないという（吉田, 2012, p.61）。しかし、このような批判は、ギデنزの考察の積極的意義を捉え損ねているのではないだろうか。本稿にてライアや村上の議論を参照して論じたように、従来の状態から新たな状態への変化は、多くの場合に段階的かつ

---

(10) ギデنزとは「ハイモダニティ」という表現を用いているが、モダニティを絶対視しているわけではない。それどころか、近代的な知識やその諸前提の不確実性を強調している。理性が伝統に取って代わった際、それは絶大な確信性を有していたが、モダニティの再帰性が理性を打破していったという（Giddens, 1990, p.39 =1993, p.56）。この指摘は、近代的理性の「絶えず疑う」という態度が理性そのものに向かうという、既に引用したライアの主張に重なる。つまり、ライアのこの主張は、モダニティの再帰性を論じたものとして理解できよう。

多様である。つまり、再帰的近代化という現象は、ある時期を境として突如生じる変化であるとは限らず、変化の前後に決定的な断絶が存在するのでもない。従来の諸要素が徐々に形を変えながら社会の変容が再帰的に進行し、やがて既存の状態とは異なる新たな特徴を確認できるに至る。近代化の進展に伴って出現したその新たな状態を、ライアンは「ポストモダニティ」と称していると考えられる。Lyon (2001) では、この概念が次のように定義されている。ポストモダニティとは、モダニティのある側面が膨張して、モダニティがそれとして認めがたくなる状況であり、それゆえこの概念は新たな社会編成に関する問いを提起する (Lyon, 2001, p.171=2002, p.287)。ただし、「ポスト」という表現にもかかわらず、それはモダニティの終焉以後の状況ではない。上に引用したライアンの定義が示しているのは、再帰的な変化を伴うモダニティの徹底化の結果として出現した状況にほかならない。

最後に、本稿での考察を通じて得られた成果を改めて整理しておきたい。第一に、ライアンが「ポストモダニティ」という概念を用いる意図や、その背景に存在すると考えられる問題意識を、本稿では明確にした。なぜライアンが「ポストモダニティ」という表現を積極的に採用するのか、また、ポストモダニティに関する考察において参照されている論者の主張との異同はどのようなものであるか、従来は必ずしも明確ではなかった。これらの点を詳しく論じたことで、ライアンの議論をより正確に、かつ、深く理解することが可能になったはずである。第二に、ライアンが論じる今日の社会状況については、「再帰的な変容を通じたモダニティの徹底化」と表現した方が、「ポストモダニティ」よりも議論としてより整合性があることを論証した。先行研究においては、今日の社会状況をめぐるライアンとギデンズの理論上の関係についての立ち入った検討はなされておらず、この点を本稿にて明らかにしたことの意義は大きいと考えられる。第三に、本稿での検討を通じて、ライアンが言及したポストモダンの諸理論を再帰的近代化論の観点から捉え直す可能性が示された。そのような作業を経て見えてくるものをライアンの議論と比較することで、さらに考察を深められるだろう。以上を確認した上で、本稿冒頭に記した研究課題の探究を進めていく。

## 参考文献

- Bell, D. (1973). *The coming of post-industrial society*. Basic Books. ((1975) 『脱工業社会の到来 (上)』 内田忠夫 他 (訳)、ダイヤモンド社。)
- Foucault, M. (1975). *Surveiller et punir: naissance de la prison*. Gallimard. ((2020) 『監獄の誕生——監視と処罰』 田村俣 (訳)、新潮社。)
- Gandy, Jr., O. H. (2021). *The panoptic sort: A political economy of personal information*. (2<sup>nd</sup> ed.). Oxford University Press.
- Giddens, A. (1990). *The consequences of modernity*. Stanford University Press. ((1993) 『近代とはいかなる時代か?——モダニティの帰結』 松尾精文・小幡正敏 (訳)、而立書房。)
- Giddens, A. (1991). *Modernity and self-identity: Self and society in the late modern age*. Stanford University Press. ((2005) 『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也 (訳)、ハーベスト社。)
- Lyon, D. (1994). *Postmodernity*. Open University Press. ((1996) 『ポストモダニティ』 合庭惇 (訳)、せりか書房。)
- Lyon, D. (1999). *Postmodernity*. (2<sup>nd</sup> ed.). University of Minnesota Press.
- Lyon, D. (2001). *Surveillance society: Monitoring everyday life*. Open University Press. ((2002) 『監視社会』 河村一郎 (訳)、青土社。)
- Lyon, D. (2007). *Surveillance studies: An overview*. Polity. ((2011) 『監視スタディーズ——「見ること」「見られること」の社会理論』 田島泰彦・小笠原みどり (訳)、岩波書店。)
- Lyotard, J-F. (1979). *La condition postmoderne: rapport sur le savoir*. Les Éditions de Minuit. ((1986) 『ポスト・モダンの条件——知・社会・言語ゲーム』 小林康夫 (訳)、水声社。)
- Poster, M. (1990). *The mode of information: Poststructuralism and social context*. Polity Press. ((2001) 『情報様式論』 室井尚・吉岡洋 (訳)、岩波書店。)
- 野尻洋平 (2017) 『監視社会とライアンの社会学——プライバシーと自由の擁護を越えて』 晃洋書房。
- 萩原優騎 (2023a) 「社会リテラシーとしての再帰的近代化論——情報倫理の社会的文脈への理解を深めるために」『東京海洋大学研究報告』 19、15-31。
- 萩原優騎 (2023b) 「プライバシーの文脈の多元性と情報倫理の関係——SNSを用いたコミュニケーションに関する課題を中心として」『社会科学ジャーナル』 90、77-98。
- 萩原優騎 (2024a) 「学際的な研究能力育成の試みとその過程——倫理学と社会学を対象とした文献講読を事例に」『東京海洋大学研究報告』 20、37-53。
- 萩原優騎 (2024b) 「フィルターバブル論の精神分析的観点からの解釈の可能性——パーソナライゼーションの問題を中心として」『社会科学ジャーナル』 91、47-67。
- 村上陽一郎 (1976) 『近代科学と聖俗革命』 新曜社。
- 村上陽一郎 (2007) 「科学と近代化」 村上陽一郎 (編) 『近代化と寛容』 (pp.9-16)、風行社。
- 吉田純 (2012) 「再帰性概念の社会情報学的意義についての予備的考察」『社会情報学』 1(1)、55-63。

※ 本稿は、科学研究費・基盤研究 (C)：課題番号 24K03329 による研究成果の一部である。